

## ハーフ トルース(Half Truth)

千葉大学名誉教授

佐藤 甫夫

昨年出たセシルの内科書に新しい章 EBM(evidence based medicine)が追加された。

EBM は厳密な臨床研究を行いその結果を臨床に活用しようという新しいパラダイムで、特に統計的手法が強調されている。またいくつかの臨床研究をメタアナリシスにより統合し、多数のデータが利用可能になると考えている。その結果臨床ガイドライン作成の機運が活発である。当然の事ながら ガイドラインは医師の臨床経験や技術を補完することを主眼とすべきであって、医師の責任ある裁量を超えることはできない。従って「業界標準」を意図したり主張するものであってはならない。EBM は、統計的手法や概念に、過大な期待を抱かせようとしている。

象徴派の詩人 マラルメ が「方法はすべて虚構である。ただし、外観は良い。」と述べている。マラルメが 科学を語ったのではないと思うが、統計学の前提にある確率論は数学的抽象の上に成立している。現実の事象に数学的抽象を当てはめることはモデル化した現実を論じているに過ぎない。従って統計的結論は、他の方法でその妥当性を充分検証されなくてはならない。たとい 厳密な統計的手法を用いたとしても、その結論が自動的に正しくなるわけではない。

そもそも EBM で言う エビデンスは本来統計的データという程度の意味である。しかしエビデンス という言葉には「厳密な科学的根拠」という ブランドイメージがある。その結果「統計的データに基づく医学」は「厳密な根拠に基づく医学」にすり替えられてしまう。また EBM では、データから作成された統計量を既存の言葉で表現する。これによって借用された言葉の意味が拡張され、それを使用している間に、言葉が一人歩きし 統計量の定義の経過が忘れられてしまう。そのよい例は文献の引用統計とインパクトファクターの関係である。

さて、half truth という言葉がある。事実の一部を伏せた本当の話をいう。通常、人を騙す目的で、一部を伏せる。メディアにのる情報はすべて half truth であると言って過言では無い。どんなに記者が努力しても真実のすべては把握できないし、編集段階でカットされる事実もある。メディアでは、さらに嘘の情報もあり、また美しい cover を纏った目眩ましの言葉もある。「嘘は真実と思われる危険がある。真実はそれだけが真実だと思われる 危険がある。」と ロベール マレーが述べている。たとえば globalization という言葉は「良いことを地球規模に広げる」と言う麗しき錯覚に支えられているが、実際は「善悪ふくめて地球規模」という事になっている。「悪の地球化」にならないためには、良識と洞察が必要であろう。おなじように、アジア経済の危機では、各国の政権の腐敗や経済運営の失敗が原因とされたが、これは 国際投機集団と結託した人々の犯罪的役割を隠す cover

であったことは明白である。

ハーバードの Galbraith 教授は 1998 年 7 月 6 日 Japan Times に掲載された対談のなかで「ウォール街の狂気(より穏やかに言えば 投機エラー)は、今や絶好の口実(cover)をもっている。今だとすべてインドネシア、マレーシャ そして場合によっては日本の所為にできる。」「IMF の特異な天才は、責任をとるべき者を救済し、罪のない多数の人々に 巨大な 苦難をもたらした。アジアで今それが起きている。」「投機はいつも新しいパラダイムを纏っている。新しいパラダイムには いつも用心しないとイケない。」などと述べている。EBM については、統計万能の錯覚に陥らず、棄却された事実も含めて吟味する態度が必要である。また、メディア は half truth の発信源であり、騙されたり、錯覚を誘導されないよう広い視野を培う必要がある。